

令和8年度（2026年度）

京都市立芸術大学 美術学部

入学試験問題

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

目 次

描写	1
描写対象物（画像）	2
色彩	3
色彩解答用材料（画像）	4
立体	5
立体制作用材料（画像）	7
小論文	9
出題の意図、評価のポイント、受験生へのメッセージ （描写・色彩・立体・小論文）	13

2026年度 実技試験問題

科目 描写

時間 9時10分～13時10分

与えられた色画用紙、レモン、ペットボトルの特性を活かして
構成し、下記の条件に従い、
答案用紙に鉛筆で描写しなさい。

●条件

1. 色画用紙は手でやぶって切り込みを1回入れること。
ただし、色画用紙は2つに切り離さないこと。
2. レモン、ペットボトルは加工しないこと。
3. 与えられたすべての対象物は、台紙上に乗せて構成すること。

【支給されるもの】

色画用紙1枚、レモン1個、ペットボトル1本、答案用紙1枚、台紙1枚、
採点用カラーカード1枚

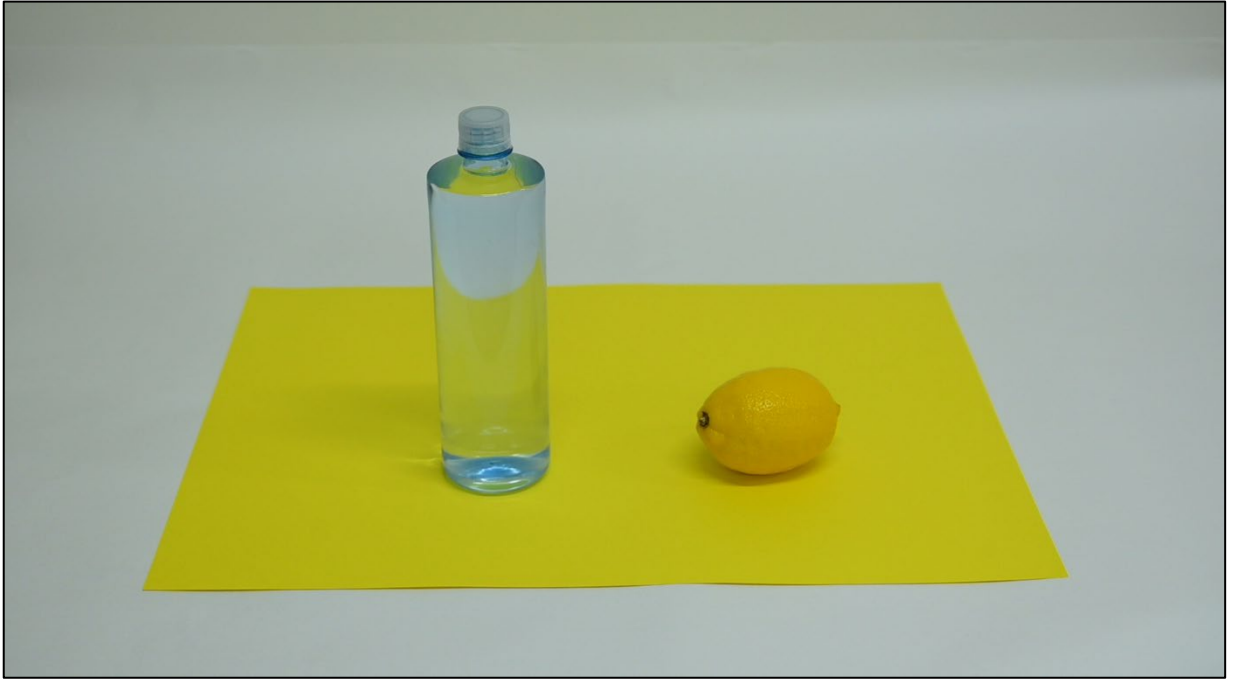
【使用してよいもの】

カルトン（56cm×40cm以上）、カルトン用クリップ、鉛筆（色鉛筆は除く）、
消しゴム（練り消しゴムを含む）、羽ぼうき（又はダスティングブラシ）、
カッターナイフ（鉛筆削り用）、ボールペン（採点用カラーカード用）

【注意】

1. 答案用紙は縦横、表裏どちらを使用しても構いません。
2. 答案用紙と台紙は同じものです。どちらを答案用紙にしても構いません。
3. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
4. 【支給されるもの】の補充、交換は行いません。
5. 試験中は着席し、他の受験生の迷惑とならないようにすること。
6. 忘れた用具の貸し出しはしません。
7. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
8. 試験終了15分前に、指示に従い採点用カラーカードを答案に貼りつけること。

【描写：対象物】



2026年度 実技試験問題

科目 色彩

時間 15時00分～18時00分

下記の条件に従い、「奥行き」をテーマに、色彩豊かに表現をなささい。

● 条件

1. 答案用紙の中央に、30cm×40cmの解答画面を作り、解答画面の内側に彩色すること。
2. 解答画面には、3つの正円を配置し、正円の外側を直線のみで分割すること。
3. 正円の大きさは自由であるが、解答画面よりはみ出さないこと。また、正円同士は重ならないこと。
4. 3つの正円の内部には、分割面をつくらないこと。
5. 正円、直線で分割された面は一色だけで彩色し、色の濃淡を用いずにベタ塗りのみとすること。

【支給されるもの】

答案用紙1枚、構想用紙1枚、採点用カラーカード1枚

【使用してよいもの】

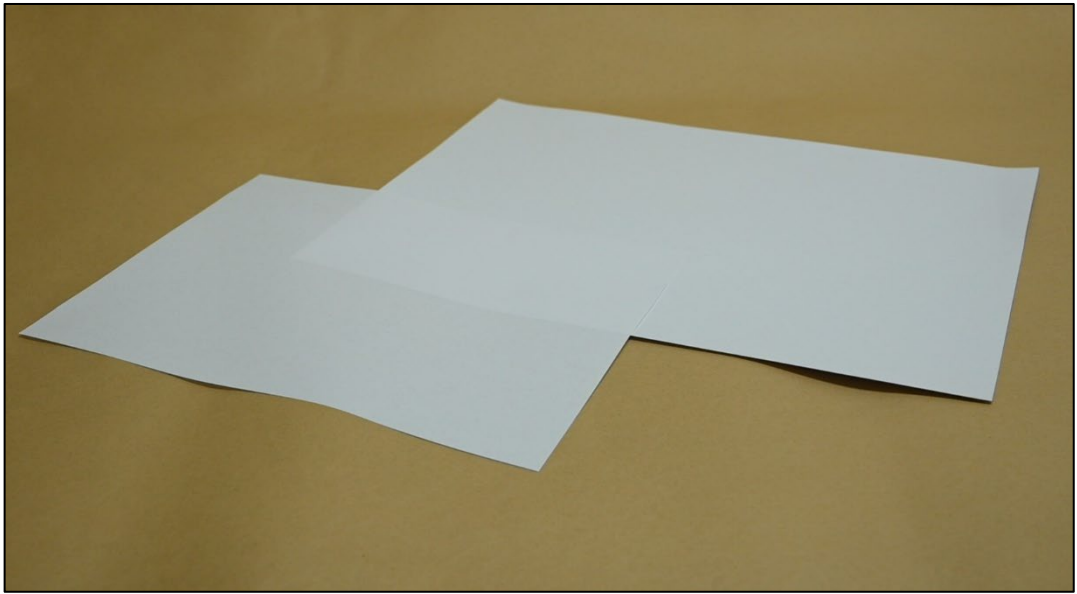
透明水彩絵具、不透明水彩絵具、パレット（又は絵具皿）、筆、筆洗、雑巾、直定規（60cm以内、目盛付き）、分度器、コンパス、鉛筆、消しゴム（練り消しゴムを含む）、カッターナイフ、カルトン（56cm×40cm以上）、カルトン用クリップ、羽ぼうき（又はダustingブラシ）、ボールペン（採点用カラーカード用）

※不透明水彩絵具とは、ポスターカラー、グアッシュ等をさします。

【注意】

1. 答案用紙は、縦横・表裏どちらを使用してもよい。
2. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
3. 【支給されるもの】の補充は行いません。
4. 試験終了15分前に、指示に従い採点用カラーカードを答案用紙に貼り付けること。
5. 試験中は着席し、他の受験生の迷惑とならないようにすること。
6. 忘れた用具の貸し出しは行いません。
7. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
8. 机の上の模造紙が汚れたり破れたりした場合でも、張り替え、交換は行いません。

【色彩：解答用材料】



2026年度 実技試験問題

科目 立体

時間 9時20分～12時20分

「とても重い立体」を与えられた材料を使って表しなさい。

●条件

1. 答えは答案用台(35cm×35cm)をはみ出さず、また、高さ35cmからはみ出さないこと。
2. 接着や形状をかたちづくる為の材料として木工用速乾接着剤、紙粘着テープを使用すること。ただし、容器・芯材は含まない。
3. 支給された制作用材料を用いて十分な強度を持たせること。
4. 答案用台および答案には描画・着色しないこと。
5. 答案用台は答案を接着・固定する以外は加工しないこと。
6. 答えは答案用台の白色面側にしっかりと接着・固定すること。(試験終了後、各自移動用カバーをかぶせ、答案を持ち、答案提出場所まで移動します。)
7. 支給された制作用材料は、使い切らなくても良い。

【支給されるもの】

制作用材料 : 新聞紙2部、ケント紙1枚、木工用速乾接着剤1個、
紙粘着テープ1巻

答案用台 : 白色段ボール1枚(35cm×35cm×0.5cm)

制作支援用品 : 灰色ボール紙1枚(作業用)、上質紙1枚(アイデアスケッチ用)

採点用カラーカード : 1枚

移動用カバー : 茶色段ボール製箱1個、カバー固定用テープ2枚

【使用してよいもの】

鉛筆、消しゴム(練り消しゴムを含む)、カッターナイフ、はさみ、分度器、

直定規(60cm以内、目盛付き)、三角定規(30cmのもの1組)、コンパス、

雑巾、粘土へら、ラジオペンチ(刃付のもの)、ボールペン(採点用カラーカード用)

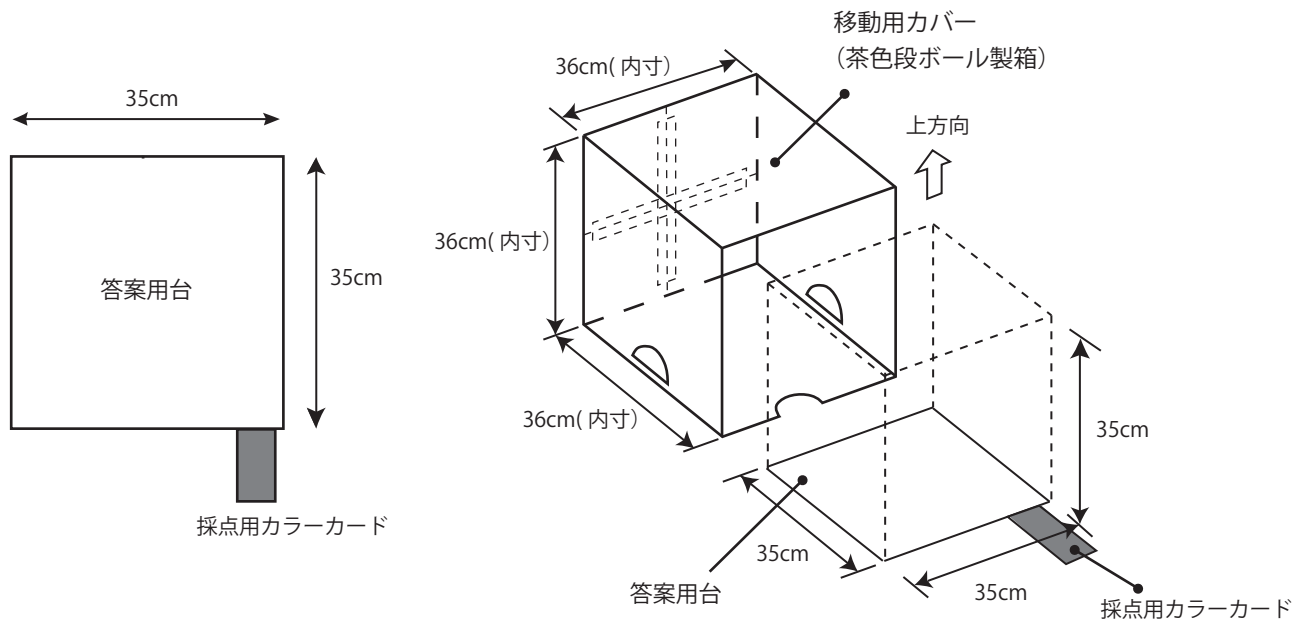
【注 意】

1. 上質紙1枚は、アイデアスケッチ用として使用すること。
2. 作業は支給された灰色ボール紙の上で行うこと。
3. 怪我のないように慎重に作業すること。
4. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
5. 【支給されるもの】の補充は行いません。
6. 試験終了15分前に、監督者の指示に従い、採点用カラーカードを答案用台の右前端に貼りつけること。
7. 試験中は着席し、他の受験生の迷惑とならないようにすること。
8. 忘れた用具の貸し出しはしません。
9. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
10. 机の上の模造紙が汚れたり破れたりした場合でも、張り替え、交換は行いません。
11. 水の使用は認められません。

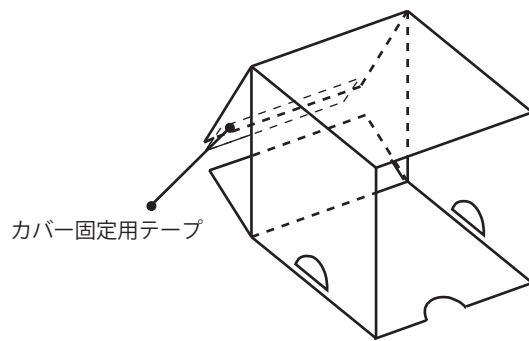
【立体：制作用材料】



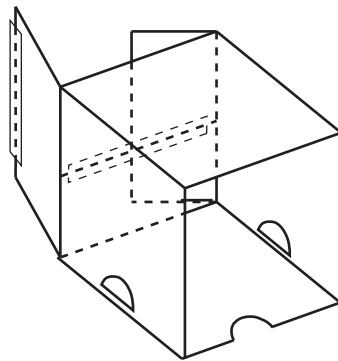
移動用カバー 組み立て説明



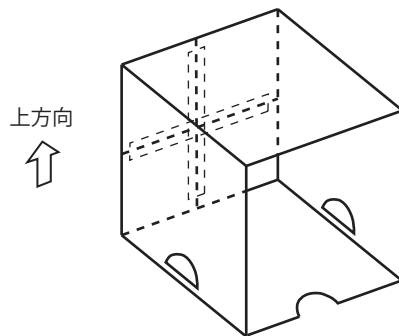
移動用カバー (茶色段ボール製箱) 組み立て順序 ① ② ③



- ① フタは上下を先に閉じる
カバー固定用テープを外側に貼る



- ② 左右を閉じる
カバー固定用テープを外側に貼る



- ③ 移動用カバー完成

二〇二六年度 総合芸術学科入学試験問題
科目 小論文(二〇〇点満点)
時間 十五時〇〇分～十七時〇〇分

別紙の問題文は、山極寿一「ヒト以外の美意識―ゴリラから学ぶ」から抜き出したものである。
この文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

設問一 問題文の内容を、二〇〇字以内で要約しなさい。

(六〇点)

設問二 人はアフリカに出現してから、作り出したモノによって自分の思いや記憶を外に出してシンボルとして共有し始めたという旨を、山極氏は傍線1で述べています。「外部化」「共有」というキーワードを使って、あなたがよく知る芸術作品の説明を試みなさい。

(六〇点)

設問三 アートはコミュニケーションだとする主張(傍線2)に対して、あなたはどのような立場を取りますか。山極氏の主張を補足、あるいは反論しつつ、あなたの考えを述べなさい。

(八〇点)

《注意》

- ・ 答案用紙に受験番号・氏名をボールペンで記入してください。
- ・ 答えはすべて配布された答案用紙に記入してください。
- ・ 答案用紙は横書きで使用してください。
- ・ 答案用紙の罫線に沿って答え、最初に設問番号を明記してください。
- ・ 答案用紙は、罫線のある面だけを使用し、裏面は使用しないでください。
- ・ 追加の答案用紙が必要な場合は、試験監督に申し出てください。その場合、追加の答案用紙にも受験番号と氏名を明記し、1枚目の答案用紙の最後に「2枚目に続く」と書いてください。さらに答案用紙を追加した時も「3枚目に続く」と記すなど、以下同様にしてください。

【出典】山極寿一「ヒト以外の美意識―ゴリラから学ぶ」(高階秀爾編『人の心を動かすことができるなれば、芸術ではない。連続講座「芸術は何処へ？」』ミネルヴァ書房、二〇二〇年) 一六〇―一六五頁

山極寿一「ヒト以外の美意識―ゴリラから学ぶ」(高階秀爾編『人の心を動かすことができなければ、芸術ではない。連続講座「芸術は何処へ?」』ミネルヴァ書房、二〇二〇年)

現代人はそれまでの人類と違って、アフリカで登場した人類としてはとんでもない方向へと進出をしいった。日本列島にも三万年前くらいにきている。いま言われている芸術の最初の痕跡というのは、南アフリカのブロンボス洞窟で、七万七〇〇〇年くらい前に現代人の祖先が使ったと思われる赤色オーカ―——染色に使う酸化鉄——が見つかった。同時に石や貝に彫られた線状のシンボルが見つかった。この頃、言葉をしやべっていたかどうかは分からないけれども、言葉に代わるようななんらかのシンボルが使われたと思われるわけである。そして色が出てくる。赤色オーカー、赤というのは人間がいちばんよく使う色だと思う。赤という好みは類人猿と同じように熟して赤い色をしたフルーツを好むという原始的な性質から来ていると思う。

赤ちゃんに色を選ばせると、赤を選ぶ確率が非常に高い。赤は人間にとって好ましい色、——いまは危険な色でもあるが——そういう人間の関心を高める色だからである。ブロンボス洞窟には壁画が残っていないし、なにかに色を塗りつけたという証拠は残っていない。では何にこの色を使ったのか。おそらく自分のからだに塗ったのだと思う。顔に塗ったのか身体に塗ったのか分からないけれども、身体とともにそれは無くなってしまった。ここで着脱可能な装飾品というものが初めて人間の世界に登場するのではないかと思うのである。

オーカーの上に線で描かれた模様は、何の意味か分からないが、何かを表わしていたのだと思う。ここで初めて人間は線で何かを描くことによってコミュニケーションをとるようになったのだ。そして四万年前に楽器が出てくる。マンモスの牙やハゲワシの骨を使った横笛が登場する。これによって人間の声ではなくて音をモノを使って出すことを覚えるようになる。そして四万年前にインドネシアで洞窟のなかに、手の跡を示しただけの壁画が現われる。これは何か色を吹きつけて手の跡を残したものだと思われるけれども、それが何を表わしているのかは分からない。しかしおそらくこのとき、人間や世界に対する認識が急速に変わり始めたのだろうと思われる。そして一万八〇〇〇年前には、例のアルタミラの壁画が出現する。これは非常に写実的な野生の牛が描かれている。ほかにも動物の絵、人間の絵も出てくる。狩猟が盛んだった時期である。このときに人間の目で見えたものを、頭の中でイメージを働かせて洞窟のなかに描くことができるようになった。これはものすごく大きな転換だろうと思う。ラスコーの壁画もそうだ。いろんな動物が現われてくるのだ。

そして中東やヨーロッパで人間にいちばん近い親戚であるネアンデルタール人と出会うわけだが、このときネアンデルタール人は言葉をしゃべっていなかっただろうと思われる。あるいはしゃべっていたかもしれないが、現代人のようなきちんという意味のある言葉ではなかったのではないだろうか。それは彼らが装飾品を一切残していないからである。石器はつくっていたし、火は使っていた。おそらく、歌とパーカッションという自らの身体を使って芸術的な創造をしていたんだろうと思われる。「現代人がアフリカに出現してからどんどんとそういう装飾品、自分の思いや記憶を外に出す、シンボルとして共有する、自分の身体が作りだした音や声ではなくて作りだしたモノによって共有する」ということを始めた。私はそのためにむしろ人間の脳は大きくなる必要はなかったのではないかと思う。記憶やイメージネーションをすべて外に出すことができたからである。ぜんぶ仕舞っていたら到底キャパシティーは足りない。そのキャパシティーを増やすためにどんどん外に出し始めたのではないか、それがまさに芸術というもの

として開花したのではないかと思うのである。

もう一つ言いたいのは、先ほど人間や動物が関心を強く持つものは優しさや強さと言ったけれども、危険な存在に対してもそうなのだ。ゴリラにとってヒョウや毒ヘビというのは非常に危険な対象だから——私も実験をしたことがあるが——ヒョウの柄を見ただけでゴリラは飛び上がる。これは本能として遺伝子のなかに埋め込まれているからだと思う。その反応を誤ると自分の命を落としてしまうから、それは習わなくても身体に埋め込まれている反応だと思われる。こういう柄に反応するのは人間にもあるのではないだろうか。それを着脱可能な模様として、飾りとして身に着けることによって権威をつける。あるいは美しさをつくりだす、危険な美しさをつくりだすということを人間は始めたと思う。

おこがましいようだが、芸術の必要条件というのを私なりに考えてみると、芸術というのはコミュニケーションであり自己主張から始まったと思っっている。だから自己主張する環境がないとダメなのである。それはまず群れをつくっているということ、自分と価値を共有する仲間と一緒にいられる、その関係が安定しているという状況がなければならぬ。しかも想像力がないといけない。自分を自分でないかたちとして相手に見せるという能力がなければならぬ。そしてとりわけ高い共感力を身につけていなければ、その表現方法もどんどん複雑になっていく。そしてとりわけ高い共感力を身につけていなければ、いろんな多様な価値観を先回りしてつくりだすことはできなかったらと思う。

そしてこの共感の部分に関係するけれども、仲間と同化し同一化したいという願望がなければならぬ。これがなければ理解することすらできない。ゴリラやチンパンジーにないのは、演じられる劇を理解する能力である。これは一段高い認知レベルと一段高い共感力が必要だからである。舞台上演じられる劇を見て、AさんがBさんを騙だまそうとしているが、Bさんは騙だまされていると分かっているながら接している、などということを観客が分かるというのは、その人物に同化できるからである。同化したうえでなおかつ外から見る能力が備わっているからである。それがなければ劇を楽しむことができない。そしておそらく、世界を新たに解釈したいという願望が出てきた。これはずっと最近になってからの出来事で、神というものが現われてきてからだと思うが、当然これは言葉をしゃべり出さなければ出てこない願望だったであろう。

言葉の持っているもう一つ大きな役割というのは、憑依ひょういするということである。もちろん憑依するということとは——着脱可能なものを着る、色を塗る、ということから始まったと思うけれども——言葉によってじつはその気になってしまおうということなのである。あいつはヒョウのようにしなやかで、オオカミのように残忍だと、言葉によって簡便に表現できる。オオカミそのものを理解させるのは大変である。しかしオオカミのようなという、類としての表現を使うことによって、それが意味しているインプリケーションを誰もが感じ取ることができるといえる。あるいはそれは絵であってもいい。これがオオカミだと認識するのに、単なる壁のしみであつてもこれがオオカミだと言える。オオカミがどういう性質を持っているかとかいちいち説明しなくても、それを同じ言葉で言い表わすと同時に、それが心のなかに住みつくわけである。そういう能力が身に着かなければ憑依はできない。そしてその憑依をすることによって人間は情緒というものを持つようになった。風の流れ、水の音を聞くのも、大きな岩を目の前にして感動するのも、情緒である。そこにわれわれは何かを感じざるを得ないのである。感じてしまうわけである。感じてしまつたらそれを表現せざるを得ないのである。

その表現はまずは言葉である。言葉によって、自分だけが感動するのではなくて他者とその感動を分か

ち合いたいという思いが生じてしまう。そしてそこに、自分が感じたものをできるだけ自分の感じた通りに正確に表わしたいという創作意欲がわいてくる。そしてそれを別のものとなぎ合わせて新しく自分の心のなかにわいたものを表現したいと思うようになる。それはすべて言葉というものの為せるわざだと私は思っている。その結果、ないものを想像する能力ができてしまう。ないものを想像する能力というのは、宗教と科学と同じである。但し、科学というのは再現性がなければならぬから、他者に何度も説明し証拠を見せなくてはならない、いわゆるエヴィデンスが必要である。そういうものを言葉がつくりあげた。だから絵画も芸術も音楽も、言葉が出現したあととは違ったものになっていったのではないかと思う。われわれは一万二〇〇〇年前に定住し始めるが、狩猟採集生活だと一カ所に定住しているわけではない。だから同じ仲間と常に安定したコミュニケーションをとることができない。しかし定住すれば、場所を使える。動かせないものでもシンボルとして使える。だから壁画が描かれ、人が動かすことができない大きな建造物がつくられ、それが芸術として、死後も子孫に伝えられていく大きなコミュニケーションの土台になったんだろうと思う。

いまわれわれが手にしている、目前にしている芸術というのは、過去からのメッセージであると私は思っている。もちろんそれをつくった人たちは、未来の人たちにそれを伝えようと思っていたわけではない。しかし一旦つくられてしまうと、それは一人歩きをして、いま私たちはそこに含まれているさまざまな意味を、あるいはイメージを、世界観をそこから読み取ることができてしまうのである。それがわれわれがいま共有している問題だろうと思う。

²最後に、アートはコミュニケーションであるということをいま一度強調しておきたい。そのコミュニケーションのなかには、われわれがそれをきちんと肌で知るために、そこに優しさというものがちゃんと含まれていなければ伝わっていかないだろうと思う。われわれは優しいコミュニケーションというものをアートのなかに鋭く感じ取って、それを他者と共有して行くのであろうと思っている。

出題の意図、評価のポイント、受験生へのメッセージ

➤ 描 写

◆出題の意図

対象物の形態、質感、量感および空間の把握について、鉛筆による明暗、色調、筆致といった基礎的な描写力を問いました。今回の出題では、類似色の関係にある色画用紙とレモンやその色が写り込むペットボトルの特性を理解した上で、積極的に対象物を観察し、その色および形態、質感の違いを描き分けることができているか、色画用紙に切り込みを入れることで生まれる形の変化を画面構成にどう活かすことができるかという、表現に対する意欲と姿勢を問いました。

◇評価のポイント

以下の項目に留意し、描写力を総合的に評価しました。

- ・対象物固有の形態を観察し、それぞれを的確に描くことができているか。
- ・対象物の立体感、素材や色の違いを鉛筆による表現で描き分けることができているか。
- ・自然物と人工物の特徴を捉え、描き分けることができているか。
- ・対象物同士の関係性、大きさ、間隔、写り込みを的確に描くことができているか。
- ・明確な意図を持って対象物の特性を活かした構成、配置ができているか。
- ・配置した3つの対象物を効果的な視点や構図で描くことができているか。
- ・鉛筆、紙、消しゴムなどの描画材を活かして描くことができているか。

■受験生へのメッセージ

支給された色画用紙、レモン、ペットボトルは、描写のモチーフとして比較的に見慣れたものです。基本的な形態・質感・量感については、これまでの経験をもとに取り組みやすい対象であったと思います。

そのうえで、本課題では類似色の関係にある色画用紙とレモンの黄色の違い、それが写り込むペットボトルの特性に目を向けてもらいたいと思いました。

さらに、条件の「色画用紙は手でやぶって切り込みを1回入れること」というシンプルな加工によって、1枚の平らな色画用紙から立体的な形と空間を作ることができます。その構成により生じるモチーフの色や質感の見え方の変化に興味を持って、対象同士の関係性を丁寧に観察・理解しながら描くことを求めました。

➤ 色 彩

◆出題の意図

3つの正円と直線のみで画面を構成し、色彩を配することで「奥行き」というテーマに沿った表現ができているかを問いました。

画面に奥行きを作るために3つの円の配置と直線分割を行い、効果的な色を用いて画面をコントロールすることで、色彩豊かな表現を求めました。

◇評価のポイント

以下の項目に留意し、色彩表現力を総合的に評価しました。

- ・ 出題内容を的確に理解できているか。
- ・ テーマ「奥行き」のある画面に仕上がっているか。
- ・ 効果的に色彩を用いているか。
- ・ 効果的に正円と直線を用いているか。
- ・ 濃淡のないベタ塗りができているか。
- ・ 限定された条件の中で意欲的な表現を生み出すことができているか。
- ・ 限られた時間のなかで、計画的に解答できているか。

■受験生へのメッセージ

条件づけられた出題内容を的確に理解し、基本的な色彩の理解と配色の感覚を、いかに使いこなせるか。また正円と直線という限られた構成要素によって画面を作りだせる力を求めました。

平面における「奥行き」表現は、線と面、色による構成において、とても基本的でありながら、重要な課題です。着色面の大きさや、形によって、色彩がもたらす効果は異なります。また隣り合う色同士によっても、色がもたらす奥行き感覚は変化します。日頃から目に映るものを観察し、また表現することを試みるなど、色と形の関係について興味深く、探究する取り組みをしてみてください。

また濃淡のないベタ塗りには、道具に対する理解とともに、経験と技術も必要となります。用具や画材を使う喜びや、好奇心を持って色彩と構成の関係を観察し表現することは、色彩に対する理解や構成力、発想力を養うことに繋がります。これらのことを日頃から取り組むようにしましょう。

▶ 立 体

◆出題の意図

素材として指定された新聞紙とケント紙はいずれも軽量の紙素材です。新聞紙は柔らかく可塑性に富み、折る・重ねる・丸めるといった操作によって量感や不定形な構造を生みやすい一方、ケント紙は張りや平滑性をもち、明確な面や構造を保持しやすい特性を持っています。

新聞紙は本来、文字や写真によって情報や意味を伝える媒体ですが、本課題ではそれらを主題として扱うことは求めています。既に意味を帯びた素材を、造形的判断によってどこまで「紙素材」として扱い直すことができるか、立体としての構成力とアイデアを評価します。

あわせて、それぞれの素材の特性を読み取り、軽量の紙素材でありながら、「とても重い立体」という相反するテーマに向かって、どのような構造的・造形的工夫によって立体として成立させるか、受験者の思考力を測っています。

◇評価のポイント

- ・「とても重い立体」というテーマをどのように捉え、明確に造形化できているか。
- ・要素がバラバラでなく、全体の統一感があり、説得力があるか。
- ・異なる質感や素材の特性を読み取り、立体に活かされているか。
- ・立体として自立し、十分な強度を持たせることができているか。
- ・造形物としての完成度や仕上げ作業など、素材をコントロールする力があるか。
- ・設定された条件の空間内に、造形物を効果的に配置し、構成できているか。

■受験生へのメッセージ

今回の課題は、軽量の紙素材を用いて「とても重い立体」を成立させることでした。

新聞紙とケント紙という性質の異なる素材をどのように読み取り、それぞれの特性をどのように扱ったのか。その理解が、形の決定や構成にどのように影響しているかを重視しました。密度や構造、支え方、面の扱いなど、造形的判断の積み重ねを見えています。

新聞紙の印刷面や広告の色については、内容を主題とすることは求めていませんが、立体として必然性を持って機能している場合には評価しています、重要なのは、意味ではなく造形として働いているかどうかです。

軽い素材で「重さ」をどう考えたか。素材の特性と向き合いながら、どのように工夫したか。その姿勢が、立体には表れます。

制作では、まず素材と条件をよく見ること。問いによって発想が変わる経験を大切にしてください。

➤ 小論文

◆出題の意図

この文章は、人類学者が特に霊長類学の視点から、人間の芸術はどのように生まれてきたのか、その特性は何であるかと考えるかを語った文章です。霊長類学という特定の視点からの主張を読み解き、自己のものとして理解した上で、自身が興味を持つ芸術に関する主張に如何に結びつけ、分析的、批判的、発展的に論述できるかを問いました。

◇評価のポイント

設問ごとに、以下の観点に沿って評価しました。

設問1

- ・他者の書いた文章を読み、その内容を的確に理解することができるか
- ・その内容を要約として指定の文字数内で記述できているか

設問2

- ・文章の内容を自分自身の知識や経験に基づいて発展的に応用できているか
- ・論理的に、かつ第三者にわかりやすく、自身の考えを表現できているか

設問3

- ・他者の主張を十分に汲み取った上で、自身の主張を説得力をもって論述できているか
- ・分析的・批判的考察や柔軟な発想を含めて、広がりのある論述を展開できているか

■受験生へのメッセージ

総合芸術学科では、広く様々な芸術作品や創作活動、あるいは美術教育や社会における美術のあり方、さらには美学・芸術学的な理論などを学ぶことになります。芸術や創造行為自体が世の中の多様で広範な事象を対象にするものですから、必然的に、総合芸術学科で視野に入れ、考えるべき事柄も多岐にわたります。まずは普段から、興味の対象を狭く限定せず、色々な作品や文章に触れる経験を重ねてもらいたいと思います。

大学の研究の過程では、他者の主張をゆがめずに正しく理解すること、必要に応じて要点を再提示することなどが必要になります。そのためにも、的確に要約するというプロセスは重要です。要約の方法はひとつではありませんが、回答としての要約は、単独で読んでも問題なく元の文章の骨子が伝わるものである必要があります。

2問目は、単なる具体例の説明に終始する回答が大半でしたが、設問にあるキーワードを活用しながら発展的に話を展開しようと試みる回答を評価しました。3問目は、筆者の主張を受け入れて、その具体例を挙げるのみの回答がありましたが、ここではそれは求めていません。他者の考えを適確に理解するとともに、自身の考えをもつことが大切です。それを論理的に組み立てて、文章で相手に伝える努力を続けること、それが実を結んでゆくでしょう。

2026年4月

京都市立芸術大学 事務局 入試担当

〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1

Tel 075-585-2005

Fax 075-585-2012

<https://www.kcua.ac.jp>